

礼拝儀要解

山崎弁栄（著）

酒井正空（訳）

原文

安心要領

宗教は人の生存いけるに対して最終なによりの目的もくてきに指導みちびきを
与ふものなり、即ち心身こうじょうの向上きよし靈ひとき生命ひとと
為なさんが為いだいに偉大なる力かみを有きせる神尊かみに帰きし
此に依えいて永遠えいの生命えんと常住じょうじゅうの平和へいに入る道わ
を教しかゆ。然きらば何かみらか帰かみす所かみの主尊かみ、何かみらか求かみ
むべき所かみ、何かみらか目的とくを遂つとめべき行とく業つとめなる、是を
宗教ようりょうの三ようりょう要領ようりょうとす。

一、帰うちゅうする所とくそんの主尊とくそん、宇宙うちゅうの独尊とくそんとし偉大なる
力すべてを有すくいし一切すくいを救すくい霊すくい給すくいふ如来すくいに帰すくいす。アミダ如
来いっも即いけるち無限しんじんの光明き永恒き存在きの眞神しんじんに帰きし奉きり
此いけ活すくいる如来すくいを救すくいの主すくいと仰すくいぎ一切すくいの時すくい一切すくいの処すくい
に於せいて其しはい神聖しはいなる統治きよの下きよに靈きよき生命きよとして
事つかえまつる信心すくいなり。

二、求みくにむる所しょうめつの靈国へんか、生滅へんか 変化へんか 極へんかりなく
憂うひ悲く苦のう悩たゆ絶たゆるなき世界よりのに依属むこころの意てんを転てんじて如
来あんりゅう大光明あんりゅうの中あんりゅうに而あんりゅうも安立あんりゅうを求あんりゅうめ即あんりゅうち肉にくに死にくし
て靈れいに復よみがえ活よみがえり此こを去こらずして即こち極楽界この
聖ひと者ことなる、之こを精神こうせいの更こ生ことす。而して

現代意訳

安心要領

宗教は我々の人生に対しての最終目的を教授するものであり、それは身と心を向上させ清らかなる存在となる為に、偉大な力を持っている仏、菩薩、神などの宗教的本尊に帰依することで、絶対的に死ぬことのない生命の中に生き、絶え間なく続き尽きることのない平和の道を歩むことを教えるものである。そうであるならば、帰依するところの宗教的本尊はどのような存在であるか、そして帰依した本尊に何を求めていくべきなのか、さらには最終目的である身と心を向上させ清らかなる存在となるためにはどのような行為が必要なのか、これらは宗教の三つの要点である。

一、我々の主として帰依する本尊とは、この宇宙において唯一の存在であり、すぐれた力をもってすべての生きとし生けるものを根底から救ってくださる如来（仏陀）のこと、つまり阿彌陀仏のことである。限りない智慧と慈悲の光を持ち、真の神ともいえる阿彌陀仏に帰依して、この活ける阿彌陀仏を救いの主として信じ、どのような時であれ、どのような場所であれ、阿彌陀仏の尊い思し召しのもとで清らかなる人として生きることが信仰である。

二、我々が求めるべきは穢れのない清浄な世界、生まれては死に、死んでは生まれ常に変化し、また憂いや悲しみ、苦悩が止むことがない現在の心を翻して、阿彌陀仏が放つ智慧と慈悲の光の中に安心を定めること、つまり迷いの私が起こす執着心をなげうち、清らかな信仰の道に進み、ただ今から仏の世界の住人たる菩薩となること、これを精神の生まれ変わりという。

それに加えて、

このにくだいおわり のちむよ
此肉体 終て後無余ネハンなる眞実の浄土に生
ず、之を体の更生とす。併て是を求むる所の
みくに
靈国とす。

三、救はるゝ行業、所求の目的を達せんが為に
如来の光明に依りて靈き生命に入る行業なり。

先づ主なる如来に帰し大光明を獲んが為に

讃嘆祈禱を捧て拝礼し常に請求感謝の誠心よ

り一ら聖名を以て祈念し若は口称若は観念

専ら如来を憶念し、彼此の三業相離れざるを

要す、若は祈禱拝礼または称名三昧又は坐禅工

夫等の心行を作す所以のものは即ち是如来の

心光に接し而も靈き生命に入るべきの手段た

るに外ならず、要する処宇宙の主なる如来を信

じその大光明中に安立し之に依て生き働き存

すべきあるなり。

仰いで諸々の賢者に白す、願くば朝夕に於て

斯光明讃嘆章及び祈禱をもて而も拝礼し尋常

に四六時中大光の中に靈き日活あらんことを

祈り玉へ、然る則は眞正の幸福は必ず与らる

べし。

是宗教安心の要領を陳て以て信念の修養

あらんことを勧むる所以なり、仏陀禅那敬つて

言す。

我々の命が終わった後は肉体的制約からも解
き放たれた眞実の仏の世界を体験するのであ
る、これを身体生まれ変わりという。これら
二つを合わせて、求めるべき清らかなる世界と
する。

三、阿弥陀仏の救いにあずかる行為、身と心を
向上させ清らかなる存在となる目的のために
阿弥陀仏の智慧と慈悲の光によって、清浄な宗
教生活に入る行為。まず、我々の主である阿弥
陀仏に帰依して、阿弥陀仏の智慧と慈悲を被る
ために、阿弥陀仏を讃え祈りを捧げ、礼拝し、
常に阿弥陀仏に請い願ひ感謝の眞心から阿弥
陀仏の御名を称えることに専念し、「南無阿弥
陀仏」と口にしたり、阿弥陀仏と自分を一つに
して、一心に阿弥陀仏をお慕いし、阿弥陀仏と
自分との身体と言葉と精神の三つ要素が離れ
ないようになることが必要である、祈禱礼拝、
「南無阿弥陀仏」と称える念仏三昧、坐禅や公
案などの心構えや修行の実践は、阿弥陀仏の救
いの光に接し、清らかなる生活に入るための手
段である、つまりは大宇宙の中心にいらっしや
る阿弥陀仏を信じ、阿弥陀仏の放つ智慧と慈悲
の光に安心を定め、これによって生き働くべき
ものである。

敬つて賢者である皆様に申し上げます、どう
か朝晩に『無量寿経』に説かれる「光明歎徳章」
を読み祈り、加えて礼拝し、どのような時でも
阿弥陀仏の光のなかに清らかなる生活ができ
るように祈ってください、そうすれば本当の幸
福は必ず与えられます。

宗教における心の定めかたの要点を述べて、
それによって信仰の修養をお勧めする次第で
す、弁栄が敬つて申し上げます。

如来光明歎徳章要解

序

如来は宇宙の生命なり。聖旨に帰命ふものは
永恒の生命とならん。

如来は宇宙の光明なり。聖寵を光被るものは
聖き靈とならん。

六大本ビルの身心なりと識るときは、宇宙の
無限なる即ち如来の法身なり。然らば即ち宇宙
は外面より観る時は蒼々たる天地唯物の存在

の如くなるも、内は即ち心霊に充滿せ玉ふもの
と曰はん。天地万物に秩序あり条理あるは全知

の作用にて一切の運動活動は全能の功用にま
しませり。

全知全能即ち如来の光明なり。（若し威力と
光明とを分ときは威力を全能とし光明を全知
とすべし。今は総てを光明とす。）斯光は天則
秩序の理法としまた原動力として一切万物を
産出活動せしむ。若し宇宙に斯光なからんか、
人に精神なきと同じく盲目的死物的秩序もなく
活動もなかるべし。然るに万物に秩序あり運
動あるを見る時は、誰か此性能の存在を否定す
ることを得ん。斯光天則の理法として万物を開
発するのみにあらず、進んでは一切の生命を向

上し、聖き靈と成し、終局の目的なる涅槃に撰
取し玉ふ理性存せり。ネハンとは永恒不変なる
常世の靈界。彼処の万物は光明常に輝き、唯

光栄と靈福に充さる処なり。聖典に示せる法蔵
の本願十劫正覚の方便法身は此目的の光とし
て示現し給ひしなり。三世の仏陀は此目的の光
を衆生に教へんが為に出でたまへり。神
靈不測奇異絶驚べきものは宇宙一大靈力なり。

斯光明なり。この光天地に先だち万物を超へて、
始めもなく終りもなく、永恒本然にして、内に
非ず外に非ず、何の時何の処にも存在して不思

如来光明歎徳章要解

序

阿弥陀仏は万物の生命そのものである。阿弥
陀仏の思し召しに従う人は朽ちることのない
命を得ることができる。

阿弥陀仏は智慧と慈悲の光を与える存在で
ある。この光のはたらきを被る人は清らかなる
心となることができる。

万物における物質を構成する地・水・火・風・
空という五大と精神を構成する要素である識
大の六つの要素が仏の身と心であると認識す
る時は、この無限ともいえる宇宙全体が産みの
親としての阿弥陀仏である。そうであるならば、
宇宙を外側から見れば、天地の空・海などが青
い様や草木が茂っている様はただの物質のよ
うではあるが、内面より見た時はこの宇宙は阿
弥陀仏のあらゆる功德を秘めたものといえよ
う。天地万物に秩序や道理があるのは、阿弥陀
仏の智慧が宇宙全体にはたらいており、また万
物に運動や活動があるのは阿弥陀仏の意志が
宇宙全体にはたらいているからである。

この万物にはたらく智慧と意志こそが阿弥
陀仏の光の本質である。（もし阿弥陀仏のはた
らきを威神力と光明に分けるとすれば、威神力
を意志とし、光明を智慧とする）。この光は宇
宙に正しい秩序を与える原動力であり、一切万
物を産み出し活動の意志を起こさせる。もしも、
宇宙間にこの光が無いならば、人に精神が無け
れば理性的活動ができないように、万物もまた
秩序や活動がなくなってしまうにちがいない。

ところが、実際万物には秩序も活動もあること
を見れば、誰がその秩序と活動としての光のは
たらきを否定することができようか。この光は
宇宙の正しい秩序として万物をより良きほう
へと導くのみではなく、積極的に据えれば、宇
宙間の生きとし生ける者を進歩させ、清かな
る心へと成長させ、最終目的である涅槃とい
う覚りの世界へ導く仏の智慧のはたらきである。
涅槃とは朽ちることのない清らかなる世界の
ことである。その世界の万物は常に智慧と慈悲
の力で光輝き、繁栄と精神の幸福が充たされ
るところである。『無量寿経』において、阿弥
陀仏が一切衆生を救済するために法蔵菩薩とな
り、誓願を立てられ、気の遠くなるような長い
時間をかけて修行して覚りを得て、仏陀とな
ったのは、実にこの智慧と慈悲・秩序と活動を本
質とする光をお示しになるためであった。また
過去・現在・未来の仏陀たちもまたこの光

議の靈能を現はし玉へり。

喩へば太陽の能力に光と熱と化合との三線ありて地上の万物を化育すと同じく、如来の心光には智慧と慈悲と神聖との三靈能ましくて、人の知情意に対して明慧と平和と正善とに靈化し玉ふ徳ましませり。

嗚呼漚哉靈光の及ぼす処、各其類に随ふて化を被らざるなし。三悪劇烈の炎は清涼の風と変じ、天人の垢汚の服を浴ぎて聖靈の衣と化し、二乗見思の闇晴れて真空の月朗らかに、菩薩智慧の日月は自他を雙べて照し、仏陀果満の園には正覺の華開けり。されば一切の仏陀は斯光に依て一切智を證し、一切の聖者は斯光をもて永恒の命を得給へり。教祖釈迦牟尼ガヤの道場に於て正覺を證せし、イエスキリスト、ヨルダンに於て聖靈を感じたる、同じく此永恒の靈光に接したるに外ならず。

有人が自己心中に在ます神は外万物の中に存して光を放つと言へるが如く、此靈光自然界中に存在す、種々の相をもて衆生の為に応現す即ち聖典に明す処の觀音の三十三身、不動の忿怒、乃至塵数の示現身、皆是宇宙に遍在せる靈力の發現なり。自然萬物の中に活躍したる靈光は機能団体たる人格に在って聖的活動をなせり。即ち龍樹、天親、ソクラテース、マホメット、智者、善導、空海、源空の如き靈界の偉人皆此光の人格として現じたるものと言ひつべし。

宇宙恁麼か此光の不思議なる如きあらん。茲に因て一切の仏陀は咨嗟して讚嘆し、諸の聖者は絶號して稱揚する寔に所以あり。

諸の賢者よ、願くば我ら一切諸仏の讚稱し給ふ終局目的の光を信じ、如来の聖旨に帰命し無明の眠覺め、罪と苦より救靈れ、共に聖き心となりて、同じく弥陀ネハン界に生じ、正覺の華開きて、三身一如の妙果を結ばんことを。

のことを我々に教えるためにお出ましになったのである。万物の根底にはたらく光が宇宙間に大いなる力として存在していることは全くもって驚嘆せざるを得ない。この光は一切万物を超越して始めや終わりもなく、元々自然のままに存在し、万物の内側とか外側にあるということもできず、しかし何時でも何処でもはたらいっている不思議な力として現存している。

例えば、太陽の光には光線、熱戦、化学線という三つはたらきがあって、地球上の生きとし生けるものをつくり育てるように、如来が放つ救いの光にも、智慧と慈悲と神聖という三つのはたらきがあって、人の知恵と感情と意識に対して、明らかなる智慧と心の平和と正しい意志を与え育てる功德を持っておられる。

ああ、この清き阿弥陀仏の光は、各々の性格や能力に応じてその功德を被らない者はいない。阿弥陀仏の光は地獄・餓鬼・畜生のように苦しみに焼かれる炎を清涼の風へと変え、天界と人界における煩惱の汚れを清らかな心へと育て、利他精神に欠ける小乗の思想を離れて真の覺りをはっきり顕わし、菩薩として慈悲と智慧の光をもって自身と他者を照らし、終には仏陀として覺りを開く。そうであるから、全ての仏陀たちはこの光によって覺りを開き、全ての聖者はこの光によって、絶対に死なぬいのちを得られたのである。お釈迦様がブツダガヤにて覺りを開き、イエス様がヨルダンにて聖靈を感じ得なされたのも同様にこの清らかな光に接したからである。

ある人が自分の中にある神は、また万物の中にも存在して光を外へ向けて放っていると言うように、この清らかな光は自然界の中に存在して、様々な姿をもって生きとし生けるものの前に顕われる。仏典に示される觀音菩薩の三十三變化身や不動明王の怒りの姿、仏・菩薩の無数に顕われる姿というのは、宇宙間にくまなくはたらいっている不可思議な阿弥陀仏の威神力から出現しているのである。自然界にはたらいっている清らかな光は、能力ある人たちには聖なる活動として顕われる。つまり、龍樹菩薩、天親菩薩、哲人ソクラテス、預言者マホメット、天台大師、善導大師、弘法大師、法然上人のような覺りの境地の偉人たちは、この光が人格に現れたものと言えよう。

宇宙にどうしてこの不可思議な如き光の存在があろう。それ故に全ての仏陀たちは嘆息し、ほめたたえ、聖者たちは声を上げて稱賛されるのである。

賢者たる皆さん、私たちも仏陀たちが称賛する救済の光を信じ、阿弥陀仏の思し召しにすぎり、煩惱から目覚め、罪や苦しみの心から脱し、共に清らかな心となって、一緒に阿弥陀仏の世界に生まれ、覚りを開いて、阿弥陀仏がその身体に具えている三つの功德を私たちも身に付けようではないか。

第一節 如来の聖徳

「光明歎徳章」（『無量寿経』）の「無量寿仏」から「所不能及」までの五句は全体において主要となるところである。阿弥陀仏は宇宙全てのものに対しては尊き主であり、それには三つの意義がある。

一、阿弥陀仏はいかなる制約制限をうけない最も尊き者であり、全ての存在を超越した唯一の信仰対象。

二、阿弥陀仏は一切万物ならびに一切の仏や神を統一する大いなる力を持つ存在。

三、阿弥陀仏は生きとし生けるものをより良い方向へ成長させ、最終的には覚りの世界へ導く慈悲者。

例えば、自己の精神が身体を支配しているように、王様が国と人民を統制するように、また天体において太陽が太陽系の物理的中心であるように、阿弥陀仏は宇宙全体を制御し、全ての仏や神のなかで最も尊い存在である。したがって、阿弥陀仏の放つ強大で大いなる智慧と慈悲の光は、全ての仏たちに中で最も尊いのである。

次に「是故に無量寿仏を～」の下に阿弥陀仏の別名を並べてその功德を表している。その功德は極まりなし。以下十二の別名によって阿弥陀仏の功德を悉く説明しよう。

無量光（真理の身体。本体。存在していない場所はない。）これから説明する無量光・無辺光・無礙光の三つは本体・姿・はたらきを表し、宇宙間のいかなる処にもくまなく行き渡っていることを明かすのである。真理の身体というのは宇宙の本体のことであり、全て仏陀の本体であり、八百万の神を統一するところの本体である。この阿弥陀仏の真理の身体を体得する者はつまり覚りを開くのである。

第一節 如来の聖徳

「無量寿如来」「最尊第一」の五句は総標して宗を挙ぐ。如来は宇宙萬有に対して最尊たるに三義あり。

一、如来は絶体的最上者萬有に超勝^{ちようしょう}せる独一神尊。

二、如来は一切萬物を統撰し諸仏神明を統一せる大威力者。

三、如来は一切の生命を向上し終局目的なるネハンに撰取し給ふ大光明者。

譬へば自我が人の精神及び身体を支配する如く、帝王が一国の人民を統御^{とうぎよ}する如く、天体に太陽が諸々の星宿の中心たる如く、如来は宇宙萬有を統撰し一切佛陀天神の最勝尊なり。故に威神光明最尊第一なりとす。

是故に無量寿仏の下別して名を列ねて聖徳を表はす。聖徳無辺。十二の徳名を以て其性能を顕はすに悉く盡さざるなし。

無量光（法身。体大。処として実在せざるなし。）此下三光は如来の体相用の三大として宇宙に遍在せる性能なることを明す。法身は実体、一切仏陀の本地、諸天神明を統一せる尊体也。斯如来心体を体得するものは即ち正覚を成ず。

無辺光（一切慧、処として照さざるなし。）如来四智えんみょう明の大慧光は遍く法界を照し、衆生の知見を啓示して無上菩提さとを證らしむ。

無礙光（解脱の用、処として化せざるなし。）如来の靈力は、神聖、正義、恩寵の徳をもて衆生の肉我まよいの束縛を解きて大我の中に靈的自由を与へ、ネハンを得せしむ。

無対光。上三光の力によりて救靈すくわれたるものゝ終局ついに帰する処、上菩提さとの華開きし大ネハンの都、真善美の靈界、諸仏聖者の證入する境、常寂光土又は蓮華藏世界の名をもて表せらる。諸仏こゝに至りてミダの本覺に還り、衆生此に帰して無上の果位とす。一切に超絶す。故に無対光と名く。

炎王光。世の衆生の悪質を滅殺する光用。衆生に靈性を覆ふ所の悪質存す。即ち惑業わくごうく苦の三障是なり。惑わくとは罪惡もとの要素即ち煩惱ぼんのうなり。人此煩惱に因て悪業を作す。業因あれば必ず苦毒の果を受く。斯光よく此三障を撲滅すること恰も火炎のよく諸々の不淨物を焚やき盡すが如し。故に喩をもて炎王と名く。

清淨光（人の感覺を美化す）此下四光は人の心理に被むる処の光。衆生の眼耳鼻舌身の五官が外界の色声香味触の五塵けがの為に染汚さる。然るに期光に美化せらる感性こころは四面玲瓏靈香れいろう馥郁ふくいく五根清淨にして外塵の為に惹ひかれず。例へば蓮花の汚泥より出でて而も染著せざるが如し。

無辺光（仏陀の智慧であり、いかなる処にも智慧の光を照らす。）阿弥陀仏の四大智慧だいえんきょうち びやうどうしやうち みやうかんざつち じやうしよさち（大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智）

の光は宇宙全体を照らして、生きとし生けるものたちに仏陀の真理を開き示して見識させ、仏陀と同等の覺りを得させる。

無礙光（束縛から解放させるはたらき、いかなる処においてもこのはたらきを被らないものはなし。）阿弥陀仏の不可思議な力は、仏教の道德律、邪を捨て正しきに向かう行為、万物を慈しむはたらきという三つの徳をもって、生きとし生けるものたちを迷いの束縛から解放して、覺りという真理の中に真の自由を与え、絶対的安樂の世界を体験させる。

無対光。上記三つの光によって救われたものが最終的に行き着く境地、菩提を求めて開花した大涅槃の世界、つまり仏陀の覺りの世界、真実と善と美の極まる世界、諸々の仏陀たちや聖者たちが入る覺りの境地、真理を現す世界という意味で常寂光土や蓮華の喩えをもって蓮華藏世界などと表現される。諸々の仏陀たちはこの世界に至って阿弥陀仏の覺りと同等な境地となり、生きとし生けるものたちはこの世界に帰依することで、無上の覺りを実現する。全てを超える故に、對することが無い絶対の光として、無対光と名づける。

炎王光。生きとし生けるものも悪しき性質を滅するはたらき。生きとし生けるものには生まれながらにして保持しているぶつしやう仏性を覆い隠している悪しき性質がある。それは惑・業・苦という三つの障りである。惑とは罪惡の元となる煩惱である。人は煩惱によって悪しき行為をなす。

その悪しき行為から必ず苦しみの結果を受ける。阿弥陀仏の光はこの三つの障りを消滅させることは、あたかも炎が不淨物を焼き尽くすことに喩えられるので、炎王と名づけるのである。

清淨光（人の感覺を美化する）。この以降の四つの光は人の心理にはたらくひかりの作用。生きとし生けるものの眼・耳・鼻・舌・身というごかん五官が、外から入る色・声・香・味・触というごじん五塵のために汚される。しかし、清淨光によって精神が美化されることで、心は不信や疑念などの曇りがなく透き通り、不思議な香が漂い、五官が清淨となって五塵に惑わされること

歡喜光（人の感情を融化す。）肉我の感情は諸々の苦毒と罪惡とに充さる。若し此光に融化せる眞情は平和と歡喜とは如来の泉より湧き、自然の妙樂は天地と共に盡きることなく、心広く体肝かに、人生の靈福こゝに於て極みとす。

智慧光（知力に対して知見を与ふ。）人の知力は無明にして自ら眞理を悟る能はず。斯光衆生に仏知見を与へ神秘の内面を啓示す。即ち如来の相好光明 莊嚴 淨土の相、また内包の徳たる慈悲、智慧、等の聖相、乃至眞法身に至るまでを知見せしむ。又一切の三昧智慧神通等は悉く皆斯光より与へられむ。

不断光（人の意志を靈化す。）人の肉我の意志は我意利己主義にして俗情非靈態なり。然るに斯光に靈化せらるゝ時、聖靈態、高等なる道徳意志となりて向上的には聖旨の指導に随ひ、また自陀平等の愛をもて二利を円満にす。

難思光（信心喚起の位。）此下三光は人の修行の三階に対する如来の光。如来の靈光玄妙甚深、初心の輩が能く測るべきに非ず、初心は唯一ら不思議の信光を仰信し、斯光に接せんが為に三心五行をもて恩寵の喚起を期す。

無称光（心靈開發の位。）若し人三心五行をもて信念を修養し、如来の光に接し心靈開發する時、即ち如来の聖相を知見し、また法忍を證る。

然るに其 自證 の妙味は言語をもて詮表す

がない。例えば、蓮の花が泥の中から花開く時全く泥が付着していないが如くである。

歡喜光（人の感情を変化させる）。迷いの心は諸々の苦惱と罪惡で充滿している。もし歡喜光を被れば、迷いの心は平和と歡喜の眞心へと變化し、覺りの世界の妙なる境地を体感し続けることで身心は豊かになる、これは人生における幸福の極致である。

智慧光（人の知力に対して仏陀の見識を与える）人の知力は眞理に暗く自分で覺ることはできない。この智慧光は生きとし生けるものに仏陀境界の見識を与えて覺りの内容を開き示す。つまり、阿弥陀仏の姿や光、淨土の莊嚴な有り様、また阿弥陀仏が持つ功德たる慈悲、智慧などの清らかな有り様から覺りそのものに至るまでの見識を与える。また念仏三昧の境地や仏智や仏菩薩に見られる超人的能力などは全てこの智慧光から与えられるのである。

不断光（人の意志を菩薩へと育てる。）人が生まれながらに持つ迷い意志は、自分勝手・わがままの覺りとは正反対の卑しいものである。しかしこの不断光を被る時、清らかなで高等な道徳意志となって、仏の思し召しに指導を仰いで覺りを求め、自分自身と他者を共に思いやりをもって自利と利他を十分に具えるようになる。

難思光（信仰を呼び起こす階級。）これ以降の三つの光は、念仏信仰における修行の三段階に対する阿弥陀仏の光である。阿弥陀仏の清らかな光が奥が深く勝れていることは、信仰に入ったばかりの者には推し量ることができない、それ故に初心においては、余計な計らいは捨て、阿弥陀仏の人智を超えた光を只々信じ仰いで、この光に接しようと思つて、三つの心（至心・

信樂・欲生）と五つの修行法（読誦・礼拝・觀察・称名・供養讚嘆）によって、阿弥陀仏の功德がこちら側に起こるように祈念する。

無称光（仏性が開發される階級。）もし上記の三つの心と五つの修行法によって信仰心を修養して、阿弥陀仏の光に触れ、仏性が開發される時は、阿弥陀仏の姿を目の当たりにして聖者とされる菩薩の証を得る。しかしながら、そ

ること能はず、故に無称と為す。

超日月光（聖旨体现の位。）已に心光を感じ、意志靈化し、己は即ち如来の^{みむね}聖旨を体し、而して^{おこない}行為と^{ことば}言語と^{おもい}思想とに於て靈的行為を實際に為すべき位なり。

「其衆生有りて」の下光明十界を撰す。如来不可思議の光明は遍く法界を照して、凡聖^{ことごと}咸く其益を被むる。初に人天を益す。衆生の三垢とは^{むさぼり}貪欲^{いかり}瞋恚^{まよい}愚痴の三毒、よく人の心意を^{けが}垢汚すが故に名つく。また三垢とは人の知情意の三能を^{けが}汚す^{あか}処の垢質なり。即ち知力の垢たる無明と悪知を除きて真理を明かにし、^{こころ}心情の垢たる^{なやみ}苦悩及び^{いかり}忿恨等の煩惱を除きて而も平和と^{いくじなし}歡喜なる心情とし、意志の垢たる我意^{薄弱}の意を^た矯め、高尚なる理想と遠大なる希望をもて向上的に進行すべき道德的行為をなさしむ。故に「斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意^{にゅうなん}柔軟に^{くをぬきらくをあたう}歡喜踊躍して善心生ぜんむ」と。

「若^づ三塗勤苦」の下は、三悪道の為に^{くをぬきらくをあたう}拔苦与樂の益を明す。「三塗」とは地獄餓鬼畜生の三悪道を云ふ。若し衆生斯光に背き、邪悪残害、極重の悪を造る者は、地獄に^た墮すべき性格なり。嫉妬^{けんどん}慳貪を本とし、肉欲我欲、中品の悪を作すものは餓鬼道に業なり。愚痴弊悪にして^{よこさまのこころ}横的情操、下品の悪業は即ち畜生の^{たぐい}類比なり。

の菩薩の境地は言葉でもって表すことができないので無称という。超日月光（仏陀の徳をその身に現わすの階級。）無称光によって阿弥陀仏の智慧と慈悲の光を感じて、菩薩の意志と成り、自身が阿弥陀仏の徳を身につけ、それに加えて行動と言葉使いと心の向け方においての所作を實際に行っていく階級である。

「其衆生有りて」から始める文は迷いの六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）と悟りの四聖道（^{しょうもん}声聞・^{えんがく}縁覚・菩薩・仏）をおさめる。

阿弥陀仏の光明は宇宙全体を照らして、迷いの世界も聖なる世界も悉くその利益を被る。先に人間や天人への利益。生きとし生ける者には^{むさぼり}貪欲・^{いかり}瞋恚・^{まよい}愚痴という三つ毒にたとえられる^{まよ}煩惱があり、これらが人の心や意識を汚す垢の故に^{さんく}三垢と名づけられる。また三垢は人の知力・感情・意志の三つの能力を汚す性質である。つまり、阿弥陀仏の光明は知力を汚す無明^{むみょう}（愚痴）や^{まよ}悪しき知力を除いて真理を明らかに

させ、心の垢である^{いかり}苦悩や^{いかり}忿恨（瞋恚）の煩惱を除いて平和と歡喜の心にさせ、意志の垢である^{むさぼり}わがまま（貪欲）や^{いかり}意気地なしの心を矯正して、高尚な理想と大きな希望をもって、向上的に進むべき道德行為を引き起こさせるのである。故に經には「阿弥陀仏の光に遇う者は煩惱が消滅して、身や心の執着がなくなり、歡喜が湧き起こり、菩提心という善の心が生じる」と。

「若^づ三塗勤苦」からの文は、地獄・餓鬼・畜生という三つの悪しき世界の者ために、^{さんず}苦を^{かず}抜き^と樂を^{さんず}与える^{かず}利益を明かす。「三塗」とは^{とうず}火塗・^{けつず}刀塗・^{むさぼり}血塗のことであり、つまり地獄・餓鬼・畜生の三つの悪しき道を云う。もし人が阿弥陀仏の光に背き、邪悪にして殺生して、重い悪をなす者は、地獄に落ちる性格である。嫉妬や物

り。視よ、世に形に於てこそ人類ひとに相似たれ、
其情操こころと行為おこないをもて判断を下す時は、餓鬼道畜
生道へい炳然たるにあらずや。斯る悪道かかに墮だすべき
性格なる悪人と雖も、斯光眞理に照され、全く
既往まへくの罪惡を自覚し、悔ひ改めて聖旨に帰命す
る時は便ち救はれむ。いかにとなれば大なる慈
悲の光は千年あんの闇室をも忽ちに照破すべけれ
ばなり。故に三塗勤苦の衆生も斯光に遇ふ時は
即ち解脱を得んと。

「無量寿仏光明顕赫」の下は、四聖同化を明す。

声聞縁覚の二乗は自利の小聖、甲は四諦たいの理を
觀じ、乙は十二因縁の法を縁じ、共に見思の煩
悩を断じ、真空無我の理を悟り、同じくネハンの
妙果を期す。斯二聖は此光の消極の方面なる
真空さとりのみを證得て、已に解脱せりと謂ひ、積極
の方面を未だ曾て識しらざる所なり。

菩薩は覺有情とて、即ち斯光に由て靈きよき的生活を
なす聖者なり。斯光の萬德ほうび豊備おのれを自己の理想と
し、聖旨みわねを実現する為に益々向上し、下は一切しも
衆生を自己と同じく光の生活とし、自他平等の
利益を期すものを菩薩となす。

惜しみ・貪むさぼりをもとにして、迷い・わがまま
によって惡をなす者は餓鬼の世界の行為と同じである。愚痴や悪習の道理に合わない感情は、
畜生の世界にたぐいである。見てみよ、世の中
に人の姿であるが、その感情や行為によって判
断してみれば、餓鬼や畜生の世界の住人である
ことがはっきりするではないか。このような悪
しき道に落ちる性格の悪人であっても、阿弥陀
仏の光という眞理に照らされ、今までの罪惡を
自覚して、悔い改めて阿弥陀仏の思し召しに帰
依する時にはそのまま救われる。なぜかと言え
ば、その広大な慈悲の光は千年間続く迷いの根
源である無明の闇もたちどころに照らしてし
まうからである。故に三つの悪しき世界の者た
ちも阿弥陀仏の光に遇えば、その世界から脱却
できるのである。

「無量寿仏光明顕赫」からの文は、四つの聖な
る世界しょうもん えんがく（声聞・縁覚・菩薩・仏陀）への感化

を明らかにしている。声聞しょうもん えんがく・縁覚の二つは自
己の覚りのみを求める下位の聖道、前者は
四聖諦ししょうたい くたい じったい めったい どうたい（苦諦・集諦・滅諦・道諦）の眞理を実
踐し、後者は縁起の理法を憶念し、両者は見惑けんわく

（眞理に対する迷い）と思惑しわく（三毒など）の煩
悩を断ち、真空無我（あらゆる現象はそれ自体
で独立した存在ではないので、自我があるわけ
ではないということ）を覚り、輪廻からの脱却
を目指す。この二者は阿弥陀仏の光の消極的方
面の真空無我のみを覚ったことをもって究極
としているが、積極的方面があることを知らな
い。

菩薩は自利利他の覚りを目指す者であり、つ
まり阿弥陀仏の光によって清らかなる仏の生
活をする聖者である。阿弥陀仏の光が具えるあ
らゆる功德を自己の理想として、その功德を実
現するために、覚りを求め続け、生きとし生け
る者たちには菩薩となってくれるように、自分
と他者を平等に利益を施す者が菩薩である。

仏陀は三身具つぶさ さとに証り、四智圓まどかに照し、斯光と全く一致し、肉我の歛點悉く盡き斯光と体を一にし、斯光ちからの能力をもて自己の力とし、清浄法身は常にネハン界に安住し、外は身を百億に分ち衆生を度す、之を仏陀と為す。

靈異絶妙不可思議なる光明。一切諸仏は斯光に依て正覺を成じ、一切の聖者は斯光に由りて聖靈と化す。斯光の恩徳広大なり。故に共に其靈能を讃稱して止まず。

第二節 修行信心分

(如来光明を獲得する修行三階あり)

歡喜 開發 體現

「若衆生有もししゅじょうありて」の四句は心光の喚起と開發を明す。其光明威神功徳を聞とは是如来の恩寵をぎやくとく獲得すべき信念たねの要素なり。上の如き光明の

真理を聞き、之が信念もとの動機となりて、

宗教衝動しんこうしんとして如来あくに憧がれ、帰命信賴の心益々發達して心光を被り信念を喚起す。

信念修養に三要法あり。三心、四修、五聖行、是なり。「至心」に三心あり、聖意かなうに相應べき心の三徳。一、至心に己の罪惡を自覺り、專

ら如来の恩寵みとを信認む。二、感情に於てはすべてに超こえて如来を恋慕し至心に憶念して止まず。

三、靈国みくにに生じ聖き世嗣とならんことを欲す。

仏陀は三身さんしん ほっしん ほうしん おうじん(法身・報身・応身)を具え、四智だいえんきょうち びやうどうしやうち みやうかんざつち じやうしよさち(大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智)

を完全に体得し、阿弥陀仏の光と一体となり、迷いの煩惱をすべて断ち切り、阿弥陀仏を自分自身とし、その光の能力を自分の力にして、覺りの世界の住人となり、その身を宇宙のあらゆる処に現わして生きとし生けるものを救済する者を仏陀という。

驚くべき不可思議な阿弥陀仏の光明。全ての仏陀たちはこの阿弥陀仏の光に依って覺りを得て仏陀と成り、全ての聖者たちは阿弥陀仏の光によるからこそ聖者なのである。阿弥陀仏の光が世の人を救おうとする恵みの徳は広大である。故にしょうもん えんがく声聞・緣覺・菩薩・仏陀の聖者たちは阿弥陀仏を言葉を尽くして称讚されるのである。

第二節 修行信心分

(如来光明を獲得する修行三階あり)

歡喜 開發 體現

「若衆生有もししゅじょうありて」から「日夜称説にちやにしやうせつして」までの四つの句は阿弥陀仏の光によって信仰が呼び起され、仏性が開發されることを明かすのである。

「其その光明いじん くとくの威神功徳を聞きて」というのは阿弥陀仏の万物を慈しむその功徳を獲得する信仰の要素である。これまでに説いた阿弥陀仏の光明の真理を聞いたことで、信が起こり、阿弥陀仏に憧れ、帰依の心がますます發達して阿弥陀仏の光を受けて信仰心が呼び起される。

信仰心を養うには三つの重要な方法がある。

それは三心さんしん、四修ししゆ、五聖行ごしやうぎやうである。「至心ししん」

には三つの心がある、阿弥陀仏の思し召しに適う心における三つの功徳。一、心の底から自分の罪惡を自覺し、ひとすじに阿弥陀仏の慈悲を信じ認める。二、感情の全てを阿弥陀仏への恋慕のみで満たし、心の底からひたすら想い続ける。三、阿弥陀仏の浄土に生まれて、菩薩として仏の後継者となりたいと願う。

「不断」に四修あり。一、如来に対して無上の尊敬を捧げて。二、一行三昧に専ら如来を念じてたのおもい まじ余想を雑えず。三、聖意を体信し相續して断せず。四、聖意を体得して終身中止せず。

「称説」に五聖行あり。一、救世の福音なる聖典をよみ如来の聖徳及び浄土莊嚴等を識り以て信念を修養す。二、懺悔と感謝の誠心を表せる朝夕等の礼拝をもて信念を修養す。三、如来のみすがたじょうどのありさま好相浄土莊嚴の相及如来の智慧聖徳を知見せんが為こころをしづめに冥想觀念をも修養す。四、一心にみな聖名を称え聖旨の現はれを祈り、恩徳感謝をして信念を修養す。五、聖歌をもて聖徳を讃頌し、また香華珍膳等のささげ供ものをもて而も修業す。

斯三要法の中、初の三心は如来の靈応を感じ心光をぎやくとく獲得すべき人の心意にて、四修は信念を鞏固にし完全ならしむる方法。五行は信念修養の材料なり。修養の宗とする処は自己のこころ心意と如来のみめぐみ恩寵との投合にあり。即ち自己を如来の光明に投帰まかせ沒人まよひし肉我に死し靈我にきよき復活よみがえるするにあり。要する処若は口称、若は憶念、一行三昧をもて一に如来に心意を注ぎ、心々相續して止ざる時は、若は頓速とんそくに若は漸次ぜんじに如来の心光と感合し、恩寵おんちよう喚起かんきの機熟し、信心覚醒めざめし心霊こころの曙あけとなりぬべし、之を恩寵の喚起とす。

開発。上の三心五行によりて信心覚醒し、如来の心光をもて自己を返照する時は、己が罪悪を自覚し、道心の苦悶せめを感じ、尚進んで心霊の開発を期する時、心光内に薫じ恩寵の和気を感じ、七覚支の華開き、妙威靈応の神機、四面

ふだん「不断」に四つの態度がある。一、阿弥陀仏に對して絶対的な尊敬を持つ。二、阿弥陀仏だけを念ずることに専念して、雑念を加えない。三、阿弥陀仏の思し召しを理解して信じ、継続し続ける。四、阿弥陀仏の思し召しを理解して自分のものとして命尽きるまで中止しない。

しょうせつ「称説」に五つの聖なる修行法がある。一、仏教の経典を読み、阿弥陀仏の清らかな功德や阿弥陀仏の世界の有り様を知り信仰心を養う。

二、さんげ懺悔（自己の罪を省みる）と感謝の真心を表す、朝と夜の礼拝をもって信仰心を養う。三、阿弥陀仏の姿やいらっしゃる世界、また阿弥陀仏の智慧と慈悲を目の当たりにするために瞑想、観察を行って信仰心を養う。四、一心に「南無阿弥陀仏」と称えて阿弥陀仏の思し召しが現われることを祈り、阿弥陀仏の恩恵に感謝をすることで信仰心を養う

五、詠唱や和讃によって阿弥陀仏の功德を讃え、また焼香、華、飯食等で供養して信仰心を養う。

さんじん三心、ししゆ四修、ごしょうぎよう五聖行の中で、初めの三心は阿弥陀仏と同じ仏性を感じて阿弥陀仏の光の功德を獲得すべき人の用心、四修は信仰心を堅固にして完全に至らしめる方法。五聖行は信仰心を養う材料である。信仰心を養う目的は、自分の心と阿弥陀仏の思し召しがひとつとなるころにある。つまり、自分を阿弥陀仏の光明に身も心も投げ入れ、迷いの我は死に、仏性に目覚めることである。重要なことは、「南無阿弥陀仏」と称えることも阿弥陀仏を瞑想観察することも阿弥陀仏に専念して、中断しなければ、速やかに、もしくは徐々に阿弥陀仏の功德と心が通じ合い、阿弥陀仏の慈悲によって信仰心が成熟し、信に目覚め、清らかな心が展開される、これを恩寵の喚起という。

開発。三心や五聖行によって、覚りへの信に目覚め、阿弥陀仏の光によって自分が照らされる時は、自分の罪悪を自覚し、覚れぬことに苦悩を感じ、さらに進んで仏性の開発を目指す時、阿弥陀仏の光が自分の心の習慣として慈悲の和やかさを感じ、七覚支（覚りへの七つの修行法）が成就し、言葉で言い尽くせぬ仏性の覚醒する時、心に曇りやかげりがなく澄みきっており、大いなる喜びが起こり、身と心とがとけあ

玲瓏^{れいろう}歎^た天喜^{てんき}地、身心融液^{しんしんゆうえき}不可思議^{ふかしぎ}、其内容の眞味^{まじ}は言語道断^{げんごだうだん}に念慮^{ねんりょ}の絶たる処。こゝに於て全く肉我^{にくが}の罪より脱^{だつ}て靈我^{れいが}の生命^{せいめい}とし、心機^{しんき}一転^{いつてん}たるに及びて即ち人格^{じんかく}の革新^{かっしん}なり、之を精神^{しんせい}の更生^{こうせい}とす。経に「心の所願^{しよくわん}に随^ずて其国^{きこく}に生^なず」と。

体現^{たいげん}。信仰^{しんぎょう}の結果^{けつが}。恩寵^{おんちゆう}開發^{かいはつ}の目的^{もくてき}は心光^{しんこう}を体現^{たいげん}すべき実行^{じっぎん}にあり。「其国^{きこく}に生^な」とは往生^{おうじやう}即^{すなは}ち更生^{こうせい}なり。此に二位^{にゐ}あり。精神^{しんせい}と及び身体^{しんたい}なり。精神^{しんせい}の更生^{こうせい}とは従前^{じゆうぜん}の肉我^{にくが}を転^{てん}じて

真我^{まが}の生命^{せいめい}と化^かり、情操^{じゆうさう}一変^{いつへん}する処、便^{べん}ち新^{しん}しき人^{にん}となる。光明^{くわうめい}界^{かい}裡^り聖^{せい}の者^{もの}として昨日^{けふ}の我^がと異^{こと}れる觀^{くわん}あり。有^あ余^よの依身^{いしん}は変^{へん}らねど神^{かみ}は淨土^{じゆつど}に棲遊^{せいゆう}ぶ。聖懷^{せいゝわい}の中^{なか}に安立^{あんりつ}する真情^{しんじやう}は毀譽^{きよぼ}八風^{はふう}の為^{ため}に動搖^{どうごう}されず。既^{すで}に精神^{しんせい}更生^{こうせい}し去^さて現世界^{げんせかい}を觀^{くわん}じ來^きる時^{とき}は、昨日^{けふ}のそれと異^{こと}れり。

曾^{さだ}て蔑視^{べつし}したる如^{ごと}き厭穢^{いやな}の魔郷^{まごう}にあらで、是^{こゝ}よりは弥^{なほ}向上^{こうじやう}し目的^{もくてき}なる眞理^{しんり}の靈界^{れいがい}に進^{しん}むべき菩薩^{ぼさつ}が天職^{てんじやく}を果^はたすべき方便^{はんべん}修行^{しゆぎやう}士^しなりし。

斯^{こゝろ}光^{こう}吾^{われ}人^{にん}を自覺^{じかく}せしむるに人生^{じんせい}の眞理^{しんり}を以^{もつ}てす。然^{しか}り而^{しか}して吾^{われ}人^{にん}はいかに聖旨^{せいし}を体現^{たいげん}せん。いな光榮^{こうえい}を現^{あらわ}すべき行動^{こうどう}せん。曰^{いは}く、吾^{われ}人^{にん}は聖子^{せいし}たる靈^{れい}我^が實現^{じっげん}の為^{ため}にあらゆる力^{ちから}を竭^{つく}すぐき^きにあり。即^{すなは}ち理想^{りしやう}の觀音^{くわんおん}として我^がと他^たとを同一^{どういつ}視^しし、他^たの苦^くは即^{すなは}ち己^{おのれ}が苦^くなり、己^{おのれ}が業^{ごふ}を以^{もつ}て他^たに分^わたんと欲^{ほつ}す。正義^{せいぎ}の意志^{いし}は勢至^{せし}と同^{どう}うし、即^{すなは}ち己^{おのれ}を尅^せめ己^{おのれ}を犠^ぎて聖意^{せいい}の現^{あらわ}れにつとめ、己^{おのれ}が分^{ぶん}を守^{まも}り他人^{たにん}の福祉^{ふくし}を保護^{ほご}し、

つて安樂^{あんらく}になることは思い測^{おもひそ}ることはできず、その内容^{ないよう}が眞実^{しんじつ}なることは言語道断^{げんごだうだん}で、思慮^{しりょ}することは到底^{たいてい}できない境地^{きんぢ}。ここに到^{いた}つて迷^まいの我^がが造^{つく}る罪^{つみ}から抜^ぬけ出^でて、阿弥^{あみ}陀^だ仏^{ぶつ}を眞^まの我^がとして、心機^{しんき}一轉^{いつてん}することで人格^{じんかく}が革新^{かっしん}される、これを精神^{しんせい}の生まれ變^かわりという。經典^{きんけん}に「心の願^{ねが}うところ^{ところ}にしたがってその国^{くに}にうまれる」と。

体現^{たいげん}。信仰^{しんぎょう}の結実^{けつじつ}。阿弥^{あみ}陀^だ仏^{ぶつ}が慈悲^{じひ}によって生きとし生^なける者^{もの}の仏性^{ぶつじやう}を開發^{かいはつ}する目的^{もくてき}は、阿弥^{あみ}陀^だ仏^{ぶつ}の功德^{くつとく}を生^なきとし生^なける者^{もの}に実践^{じっせん}させることにある。「その国^{くに}に生まれる」とは往生^{おうじやう}、

つまり更生^{こうせい}のことである。この更生^{こうせい}には二つ階級^{かいけい}がある。精神^{しんせい}における更生^{こうせい}と身体^{しんたい}における更生^{こうせい}である。精神^{しんせい}の更生^{こうせい}とはこれまでの迷^まいの我^がの状態^{じょうたい}が變^かわり、仏性^{ぶつじやう}を眞実^{しんじつ}の我^がとし、感情^{かんじやう}や情緒^{じゆうじやう}が一變^{いつへん}する境地^{きんぢ}、つまり新^{しん}しい人^{にん}となる。阿弥^{あみ}陀^だ仏^{ぶつ}の世界^{せかい}の聖^{せい}なる住人^{ぢゆうにん}として、昨日^{けふ}まで自分^{自分}とは異^{こと}なつた感^{かん}覚^{かく}がある。この肉^{にく}体^{たい}は變^かわらないが心^{こゝろ}は阿弥^{あみ}陀^だ仏^{ぶつ}の世界^{せかい}の住人^{ぢゆうにん}である。阿弥^{あみ}陀^だ仏^{ぶつ}の中^{なか}に安心^{あんしん}を定^{さだ}めた眞実^{しんじつ}の感情^{かんじやう}は毀譽^{きよぼ}褒貶^{ほうてん}に動^{うご}かされることはない。すでに精神^{しんせい}の生まれ變^かわりをして、人間^{にんげん}界^{かい}を觀^{くわん}察^{さつ}する時^{とき}は、昨日^{けふ}までの觀^{くわん}じ方^{かた}とは異^{こと}なつてい^いる。かつて輕蔑^{けいべつ}していたよ^ような嫌惡^{けんお}する穢^{けが}れた世界^{せかい}でなく、菩薩^{ぼさつ}が覺^さり世界^{せかい}へ進^{しん}むための、そして菩薩^{ぼさつ}がその努^{つと}めを果^はたすための修行^{しゆぎやう}をするための世界^{せかい}となる。

阿弥^{あみ}陀^だ仏^{ぶつ}の光^{こう}は人生^{じんせい}の眞理^{しんり}を私^{わたし}に自覺^{じかく}させる。そうではあるが、私^{わたし}はいかにして体得^{たいとく}した阿弥^{あみ}陀^だ仏^{ぶつ}の思^しし召^めしを現^{あらわ}わすことができようか、いや、菩薩^{ぼさつ}としての実践^{じっせん}ができようか。言^いうことには、私^{わたし}は仏^{ぶつ}の子^こたる菩薩^{ぼさつ}として覺^さりの實現^{じっげん}のためにはあらゆる力^{ちから}を尽^{つく}さなければならぬ。つまり、觀音^{くわんおん}菩薩^{ぼさつ}を理想^{りしやう}にして自分^{自分}と他者^{たにん}を同等^{どうとう}に感^{かん}じ、他者^{たにん}の苦^くは自分^{自分}の苦^くである、自分^{自分}が業^{ごふ}をもつて他者^{たにん}のために分^わけ与^よえようと願^{ねが}う。覺^さりのために惡^{あく}を廢^{はい}して善^{ぜん}を修^{しゆ}する意志^{いし}は勢至^{せし}菩薩^{ぼさつ}の意志^{いし}と同^{どう}じく、つまり自分^{自分}を捨^すてて犠^ぎ牲^{せい}にし、阿弥^{あみ}陀^だ仏^{ぶつ}の思^しし召^めしを實行^{じっぎん}することにつとめ、自分^{自分}の身^みの程^{ほど}を守^{まも}り他者^{たにん}の豊^{とよ}かさや幸^{しあ}せを保護^{ほご}し、眞^まの勇^{ゆう}氣^きで落^おち着^{ちか}いていて物事^{ぶつじ}に動^{うご}じず、いかなることに臨^{りん}んでも辛^{しん}抱^{ぼう}強^{きやう}く、ゆるみなく、また私^{わたし}は不動^{ふどう}明^{めい}王^{わう}の智慧^{ぢゐ}の

真又勇沈毅いかなることに望みても屈せず撓
まず、また吾人は不動の智剣を執りて己が貪瞋
痴を害し。地蔵の愛に倣いて世の人に待せん。
高尚なる理想を文殊の聖童に習い、遠大なる希
望を普賢の行願に学び。向上進趣、萬善萬行を
もて此土に樂邦を実現さん。悪人の迫害は心霊
を研くの利器。一切の誘惑は尅己忍耐の試験具、

若し現世界を以て 目的ある階梯なる修行士と
観じ来る時は、菩薩六度萬行を修すべき諸の器
具が全備るに非ずや。経に此土一日の修行は浄
土に於て百歳するに勝れりと。吾人は斯るが大
利なる此土なることを自覚するが故に、寸陰

を宝とし己に本務を竭さんとすべく、然り而し

て方便土のつとめを全く卒る日には、必ず目的

たる実在の報土、即ち無余涅槃界に帰る期ある
と信ず。経に「其国に生ずることを得て諸々の
菩薩声聞大衆に共に歎誉して其功德を称せら
れん」とは蓋し精神更生しおわって聖旨実現の
為に活動せる人を称するなり。

身体の更生。己に更生したる精神は如来大心
光中に理想の浄土に逍遙ぶものゝ、肉の有らん
限りは自然の約束を全く脱する能はず。弥方便

の業を卒る暁には、無明生死の夢醒て大ネハ

ン城にて無上菩提の宮に住し、真善妙美の園に
は常樂我浄の華鮮かに四智円満の日は明けく、
三身一如の月清らかなり。然るときは即ち体は
本覚の都に在て化を百億に分ち、こゝに於て一
切諸仏は即ち本覚の弥陀。弥陀即一切仏たるの

真理は自ら証らん。

剣をもって自分の貪欲・瞋恚・愚痴を除く。地
蔵菩薩の愛に倣って世の人々のために留まろ
う。高尚な理想は文殊菩薩に倣い、大いなる希
望を普賢菩薩の行いと願いに学ぶ。修行して進
み菩薩の階級が向上する、あらゆるの善行もっ
てこの世界に極樂を実現させよう。悪人の迫害
は仏性を研くための器。あらゆる誘惑は自分の
忍耐の修行における試験、もしこの世界を覚り
への階梯を進めるための修行の世界と観る時
は、菩薩の修行である六波羅蜜（布施・持戒・

忍辱・精進・禅定・智慧）の実践を具えた世
界ではないか。經典には「この世界の一日の修
行は仏の世界の百年の修行に勝る」と。私はこ
れにより大きな利益をもたらすこの世界であ
る自覚するからこそ、寸分の時間でも宝として、
自分の本分を尽くすことにつとめ、そしてこの
世界でのつとめを終える日は、目的である阿弥
陀仏の世界、つまり覚りの世界、真実と善と美
の極まる世界、諸々の仏陀たちや聖者たちが入
る覚りの境地、真理を現わす世界に帰るのであ
る。經典に「その国に生まれることを成就して、
諸々の菩薩や声聞といった聖者たちに、功德を
讃えられて称讃される」とは、思うに精神の生
まれ変わりを終えて、阿弥陀仏の思し召しを実
現させるために活動する人のことである。

身体の生まれ変わり。すでに生まれ変わった
精神は阿弥陀仏の光の中で、阿弥陀仏の世界の
住人として活動するが、肉体があるうちは自然
界のおきてにしたがってすべての煩惱をから
抜け出てことはできない。この世界で菩薩とし
ての修行を終えた時、生き死にの迷いの境地か
ら目覚めて、涅槃の城という覚りの宮殿に住み、
実と善と美の極まる世界で、常・樂・我・浄（不
滅不変・真の安樂・仏性・清浄な世界）の華が

鮮やかに、完全円満なる智慧（大円鏡智・

平等性智・妙觀察智・成所作智 という四智）

が明らかになり、清らかな三身（法身・報身・

応身）を具える。そのような時、自分の体は阿
弥陀仏の世界にありながら、化身をあらゆる世
界に放つ、ここに到って全ての仏陀はそのまま
本体である阿弥陀仏である。阿弥陀仏はそのま
まにして全ての仏陀である真理を自覚する。

如来三身の説

如来は本一体にして三身まします。三身とは法身、報身、応身是なり。

法身は宇宙萬有の源にして天地萬物を産出し保存する権能あり。法身は始めもなく終もなく本然の自性なれば自性天真仏といひ、宇宙全体が如来の身心に在ませば之を物心不二のビルシャナと云ひ、また法身は一如の体にましますも内容豊富の性徳を含蔵するが故に如来蔵性と名く。法身仏に一切智一切能の両徳を有し、天地萬物を開發し産出するに秩序を整束せる理性を一切智といひ、万物を生活々動せしむるを一切能と云ふ。法身の権能によりて生存せる精神生命を向上しそれを終局目的の大涅槃に摂め取りて無上覚を証せしむるは報身の権能なり。

報身如来とは本智慧法身の体相もなく形も無きなれども不可思議の靈力より、衆生の為に万徳円満を表せるいと麗しき相好を具へ威嚴巍く金銀摩尼寶石を以て莊嚴せる樓閣に光明永へに輝き、唯光榮と靈福とに充さるゝ処に在して、神聖正義慈悲等の聖徳圓かに備へて光明遍く法界を照し信念の衆生を摂めて報土涅槃の常樂を得せしむ。報身は釈迦如来が証見給ふ

如来三身の説

阿弥陀仏は本体は一つであるが、我々を導くために三つの身体を持っている。三つの身体とは法身、報身、応身である。

法身は宇宙全体の根本であり、万物を産み出し生命を維持する権限と力がある。法身には始まりや終わりという概念はなく、宇宙そのものに本来から備わっている性質であるから、自性天真仏（そのものが本来備わっている飾り気のない真の性質としての仏）と云い、宇宙全体が阿弥陀仏の身と心でいらっしゃればこれを物と心が不二（二元的に見える事柄も、絶対的な立場から見ると対立がなく一つのものであるということ）の仏教で説かれるビルシャナ（法身仏）と云い、また法身は一異の差別なく平等である本体でいらっしゃるわけだが、先天的に功德をそのうちに秘めていることから如来蔵性（仏の本質を宿している性質）と名づける。

法身仏には一切智と一切能の二つの功德を持っている、万物が本来備わっている仏としての性質を開發したり、万物を産み出すにあたって秩序を保たせる理性的性質を一切智と云い、万物を生活・活動させる勢力を一切能と云う。法身の権限と力によって生存する生きとし生けるものたちを覚りに向かわせ、最終目的である諸々の仏陀たちや聖者たちが入る覚りの境地、真理を現す世界に導き仏陀の覚りを自覚させるのは報身の権限と力である。

報身とは先の法身という姿かたちのない不可思議な勝れた能力より、生きとし生けるものたちのために仏としての功德の具わった美しい姿を現しつつ、金・銀・瑠璃・頗瓊・磈磈・赤珠・碼瑙などの宝石で飾られた仏の世界において威嚴をもって永遠に光を放ち続け、繁榮と精神の幸福が充たされるところにおられる、そして仏教の道德律、邪を捨て正しきに向かう行為、万物を慈しむはたらきを完全に備えて、放った光で宇宙の隅々まで照らして、信仰心を持つものたちを仏に世界に導き入れて涅槃という覚りを得させる。報身はお釈迦様が覚って目の当たりにした境地であり、私たちの信仰の結果として向うところである。

境界にて吾人が信仰の報ひとして撰取せらるゝ処なり。

応身。現世界の無明と罪惡とに迷没る物を哀憐み、報身より身を分ちて人類と同じき身を以て世に出で衆生を教度するを応身と為す。

教祖釈迦牟尼是なり。仏陀初めトシタ天に在して天上及び下界を利益し、地上に出で中印度カピラの浄飯王を父とし、マヤ夫人を母とし、

幼名をシタルダと曰ふ、聡明叡智五明四吠陀に精通し、技芸として習ふに成らざるなし、四門の遊びに世の無常を悟り、国と位とを捨て山に入て道を学し勤苦すること六年、竟にマカダ国ガヤのヒバラ樹の下金剛座に座し、禪那三昧に

入て一夜天魔の碍を降伏し臘月八日東の天

に明星の輝き出る時無明永夜の夢覚めて朗然として正覚を成じ罪惡の源を解脱し真理を悟り給ふ。仏陀は正覚の暁よりネハンの夕に至るまで教ゆるに涅槃の真理を以てす。涅槃とは無明生死の眠覚て本覚真如の顯はれたる常寂光

の都、無量の光明輝く処なり。仏陀は八十才にしてクシナなる鶴林に於て別を告るとに先だちて其徒に示して曰く、我ガヤの菩提樹下に於て正覚を得たるは方便示現の身に於て、眞法身は

無量寿如来にて在れば永恆に常住して而も滅度し給はず。凡夫が肉眼にて見る処の世界は時ありて滅すべきも我眞実の浄土は安穩にして天人常に充滿せり、園林諸の堂閣種々の宝をもて莊嚴せり、仏陀は一切の衆生を教へてネハン即ち浄土に誘く為に世に出たりと。

応身。この世で真理に暗く汚れた知力と罪・悪業によって輪廻という迷いの世界を経巡るものを憐れんで、先の報身から身体を分けて人間と同じ姿となつてこの世に生れ、生きとし生けるものを救済するのを応身というのである。仏教徒が教え主として仰ぐ仏陀、お釈迦様のことである。仏陀は兜率天という天の世界と地上に利益を与えるために、はじめは中インドのカピラヴァストウの王、浄飯王を父として摩耶夫人を母として幼名シッダールタとして誕生された。あらゆるのことを聞き分け、見分け、通じ、知るという四つの徳を持ち、声明（文法学）・因明（論理学）・内明（教理学）・工巧明（工学）・医方明（医学）という五明や『リグ・ヴェーダ』『サーマ・ヴェーダ』『ヤジュル・ヴェーダ』『アタルヴァ・ヴェーダ』などのバラモン教に精通し、美術や工芸を修学身につけ、生老病死を目の当たりする四門出遊を機に無常を悟り、国と地位を捨てて一人山に入つて徹底して修行に勤めること六年、ついにマカダ国の菩提樹の下で覺りの場に座り、瞑想三昧に入つて悪魔の勧誘を降伏させて、十二月八日の明け方東の空にかがやく星が出る時、迷いの世界から目覚め、完全なる覺りを成就して罪と悪業の根源から解脱し、仏陀となられた。仏陀は覺りを得られた時から人間としての寿命を終えられる日に至るまで仏の世界の真理をもって人々に教示された。涅槃という仏の世界とは生き死にの迷いの世界から目覚めて宇宙の根底にある眞実にして平等なるはたらきの顯れた永遠なる都、限りない智慧と慈悲の光が輝いているところのことである。仏陀は八十歳でクシナガラ地、沙羅双樹において仏弟子や信者に別れを告げるに先だつて示された、私は菩提樹の下で覺りを得たのは方便（衆生を導く手立て）であつて、私の本当の身体は阿弥陀仏である、永遠に変わることなく存在して、滅することはない。煩惱を抱える凡夫が肉眼でこの世界を見れば時間があり生滅変化があるが、仏陀の眼で見ればこの世界は安穩で徳を具えた人々に満ち溢れた浄土であり、庭園や林、高く立ち並ぶ建物は宝石で飾られている、仏陀は生きとし生けるものたちに涅槃、つまりこのような浄土へ導くためにこの世に生を受けられたのである。

法身としては天則秩序に天地萬物を産出し保存し、報身としては終局目的の規律に従って衆生を攝取して浄土に帰趣せしめ、応身としては人の身をもて衆生を教化す。斯の三身は衆生の為に三容に現するも本一体にましませり。

祈禱要解

至心に帰命す

献身とは先づ第一に己が無知無力を自覚し、己を空ふして全幅を犠げて如来に事へ奉る。文に四あり。一、宗教の要たる唯一の本尊に対して始終心を一にして無上の尊敬をなすこと。二、一切処に存在し玉う活る如来を信じて至誠心をもて恭敬ふべきこと。三、此身心は如来に依りて生存る故にアナタに献げて仕へ奉ること。四、身の行為と口の言語と意の思想に於て光栄を現はすべきこと。

解。在る處なきは經に「如来は是法界の身、一切衆生心想の中に入る」と録せり。

至心に勧請す

勧請。如来の分身たる靈応身を我身心に請じて常住の指導を祈る。

一、此身は如来の靈応を安置し奉る聖なる宮と信すべきこと。二、靈応の常住を請ふこと。三、聖意の指導を仰ぐこと。

解。靈応とは小乗教の五分法身即ち戒定慧解脱解脱知見と同じ、彼にはたとへ肉身の釈迦仏陀は已に滅し玉ふとも五分法身は羯磨の法に依りて発得し人の身内に在りて滅す

阿弥陀仏は法身として宇宙に秩序をもたらし万物を産み出し生命を維持する、報身としては覺りに導くことを目的にして生きとし生けるものたちを仏の世界に帰着させ、応身としては人の姿となって人々を教え諭す、この三つの身体は生きとし生けるものたちのために、別々姿で現れるが実際は本体は一つである。

祈禱要解

至心に帰命す

この身を捧げること、先づ第一に自分が無知であり無力であることを自覚し、自分を空しくして全身全霊をもって仏に仕え奉ることである。これには四つのことがある。一には、信仰の要となる唯一の本尊である阿弥陀仏に対して常に心を向けて最大限の尊敬の想いを持つこと。二には、阿弥陀仏は現に生きておられ、宇宙間どこにでもいらっしゃる仏様と信じて、飾らない心をもって敬うべきであること。三には、私の心と身体は阿弥陀仏によって活かされていると考えて仏様に自分を献げて仕え奉ること。四には、身体の行為と口に出す言葉と心に思う考えは菩薩の實踐を現していくこと。理解。阿弥陀仏はどこにでもおられるということは『観無量寿經』に「仏はあらゆる世界に広くいきわたっており、生きとし生けるものたちが心に仏を想うところに入る」と説かれている。

至心に勧請す

勧請とは阿弥陀仏の分身である靈応身（我々の信仰に感応して現れる仏）を自分の心と身体に迎えて常に教え導いてくださるよう祈ることである。

一には、自分の身体は阿弥陀仏の靈応身を安置するための聖なる宮殿であると信じること。二には、靈応身が常にいてくださることを願うこと。三には、阿弥陀仏の思召しによる指導を仰ぐこと。

理解。靈応身とは小乗仏教では五分法身、つまり戒律・禪定（瞑想）・智慧・解脱（煩惱からの解放）・解脱知見（解脱を目の当たりにすること）と同じで、たとえ生身のお釈迦様が人間としての寿命を終え滅するとしても、五分法身は授戒作法によって受けた人の体内で自分のものとなれば滅することはない。大乘仏教では仏は法身、つまり仏教の真理として宇宙全体の根底に勝れた能力をいきわたらせ、人が信仰心

る事なしと。大乘教にて即ち如来真法身として其^{みちから}靈能は本より法界に遍在し、人の信念ある処に随て発得す是を応身と名づく。この感應を得て始めて靈の生命とし活る信仰と成り得るなり。諸の聖者とは、觀音^{せいしもんじゅふげん}勢至文殊普賢等の法身のボサツ、龍樹天親善導法然等の生身の聖者、斯らの聖者には如来の分身たる靈応が其身心に存在し智慧兼備し、自他並べ利し、如来の聖旨を其身の行為により現し玉ふ。觀音の^{かんむり}宝冠に一の化仏を戴けるは即ち是ミダの分身たる靈^{みこころ}応が其脳裡に存在せるを表はし、而して何人の信仰も之に倣ふべきことを示し玉へるなり。

至心に発願す

進徳とは聖意を体して^{よきおこない}靈的行為を成就せられんことをいのる。

一、道德の^{もと}原動力は如来の靈応なること。二、教組^{しんぎょ}釈迦牟尼はミダの人格現なること。三、^{しんぎょ}釈迦文は教主にしてまた^{かんとく}完徳の^{かがみ}鑑たること。

四、靈^{みた}應に充されていかなる^{ばあい}境遇にも動かざる^{ちか}を誓ふこと。五、弱き我に至善の国に進むべき^{よきおこない}道德行為を成し^{めぐみ}うるやうに聖恵を仰ぐこと。

^{うるわしき}麗色とは斯經の序に「^{そのとき}爾時^{えつよ}世尊諸根悦豫し^し姿色清浄にして^{みかおけだかく}光顔巍々たり」とは世尊が斯經を説玉ふに^{すがた}先だち、いと麗しき^{すがた}相を^{すがた}示し玉ふ。ゆえは斯經に説く処の如来を信じ其慈光を得たる時は何人も皆内心が靈に充たされ内外共に清浄になり得べきを表はし玉ひしなり。

を起こすに随つてその心に現れる、これをもって信心に応じる身なので靈応身という。この仏のはたらきかけとそれを受け止める人の心があつて始めて清らかな生命となつて活きた信仰を得ることが出来る。諸々の聖者とは觀音菩薩・勢至菩薩・文殊菩薩・普賢菩薩等の真理の現れとしての菩薩や龍樹菩薩・天親菩薩・善導大師・法然上人等の實際の肉体を持つ聖者、このような聖者の心と身体の中に仏の分身である靈応身がおられるから智慧と慈悲とを兼ね備え、自分と他者を平等に利益して、仏の思し召しを自身の行為として現される。觀音菩薩が頭上の宝冠に一人の化仏を戴いているのは、信仰によって阿弥陀仏の分身である靈応身が觀音菩薩の頭の中におられる様子を表しているのだが、これは人々も觀音菩薩の信仰に倣うべきであることを示されているのである。

至心に発願す

進徳、つまりより高い人格形成を目指して修養すること、仏の思し召しを体得して清らかな行為を完成したいと祈ること。

一には、道德の源は仏の分身である靈応身であること。二には、教え主のお釈迦様は阿弥陀仏が人の姿をもって現れたお方であること。三には、お釈迦様は教え主にして仏教徒の目指すべき模範であること。四には、私たちの心と身体が阿弥陀仏の靈応身に充たされていればいかなる状況でも動揺することはないと願うこと。五には、弱い自分が最善の世界である仏の国に至るには仏の戒に則つた行為ができるやうに仏の恵みを仰ぐこと。

理解。麗色というのは『無量寿經』の序分に「その時^{しんぎょ}釈尊は、全身から喜びが満ち溢れ、姿は完全に清らかで、お顔は威厳高く神々しい」とお釈迦様が、この經を説くにあたり、麗しい姿を示したのである。その理由はこの經に説くところの阿弥陀仏えを信じ、その慈悲の光を得た時は誰であれその心の内が仏の性質に充たされ、内面も外面も清らかになることができることを表されたからである。

釈尊姿色常に清かなるは内にミダの靈に充ち玉へばなり。世尊はいかなる境遇ぼあいに臨みても麗色を変じ給ふことなし例へば一時ダイバがアジャセセ王をそそのか唆して世尊をいつわ矯り請じて火坑あなに陥して弑し奉らんとす。世尊は斯る急難おとに遇玉ひし時に当り光顔みかお殊えみをふくみに麗しく欣笑して光を放ち玉ふ。時に王其尊容のいと殊勝みかおなるを拜し感じて始めて仏陀に帰し奉れりと。また世尊は諸の外道せまりの迫害にも旋茶弥せんだみの讒謗そしりにも姿色きそん毫しも毀損し給ふことなし。世尊は害意をもて向ふ處のダイバに於るとラゴラに於ると何れにも愛憎の異想あることなしと。世の人々が貪瞋内に動く時は忽ち其面貌ぼあいに現はす。世尊は内靈に充ち玉ふいかなる境遇にも光顔を変じ玉ふことなし。

至心に感謝す

感謝。夕には今日己が身と意とに行為のいかなりしやを反省し、善事は悉く恩恵によるものとして深く感謝し、悪事は皆己が過なるが故に懺悔すべし。

感謝に二意あり。一、我身心わがみとこころの生存活動いきはたらくは全くアナタの賜たまものとして先づ其恩徳を謝し奉り。二、我身は人間として生存したりしも、若しよ聖き道すすむに向上すべき生活にあらざれば將た何の貴かあらん。然るに如来は弱き我に聖なる恩寵めぐみを加へて、恩恵を他人にまで頒つことを得さしめ給ひし其恩わか広大なり。依て深く感謝し上る。

至心懺悔す

懺悔。今日の犯したる罪惡は全く己が至らざるより起りしものなれば深くざんき慚愧して悔い改たむべし。

お釈迦様の姿が清らかなことは心の中に阿弥陀仏の分身を宿しておられるからである。お釈迦様はいかなる状況でも状況にあっても、動揺されることはなく、例えば反逆の徒である提婆達多だいぼだつたが阿闍世王あじゃせおうを誘惑して、お釈迦様を騙して火の穴へ落とし、阿闍世王の父である頻婆娑羅王ひんぼしやらおうを殺害しようとされた。お釈迦様はこのように差し迫る災難にあっても、そのお顔は麗しく微笑んで慈悲の光を放たれるのである。その時阿闍世王はその尊いお姿に心打たれて、始めて仏に帰依されたという。またお釈迦様は数多の仏教以外の宗教者の迫害にも、旋茶弥の誹謗中傷にも姿や顔色を少しも変えられることはなかった。お釈迦様は迫害の心を持つ提婆達多と実子である羅睺羅らごらに対してどちらにも平等の心で接せられた。世の中の人々は貪りや瞋りが心の中にあるとすぐ外面に現すが、お釈迦様は阿弥陀仏の分身を心に宿しておられるからいかなる状況でも動揺されることはない。

至心に感謝す

感謝とは、夕べには自身の心と身体の行いを省みて、善いことが実行できたのは仏の恩恵であると感謝し、悪いことは全て自分の過失さんげよるものと懺悔すべきである。

感謝には二つの意味がある。一には、自分の心と身体が生活活動できるのは、阿弥陀仏のお陰であるとして、その恩恵に感謝を奉げる。二には、自分は現在人間として生きていても、仏の道に望んで信仰生活を送らなければ人として生れてきた価値があるかと思ひ、阿弥陀仏はこのように煩惱を抱えた私に慈悲の恵みを与え、さらにその恵みを他者に分かち与える力を得るようにさせていただけけることは、広大な恩恵である。それ故に仏に深く感謝申し上げるのである。

至心懺悔す

懺悔とは、今日造った罪や悪い行いは全て自分の至らなさから起ったものであると思ひ、深く恥じる心を持って悔い改めなければならない。

罪惡を犯したる原因に二あり。一は己が肉を
恣ほしいままにせしより。二、如来の恩寵を忘れしより。

懺悔の時己が罪を吟味ぎんみすべし罪の目録に三あり。
一如来に対し。(一)如来を忘れざりしか、(二)、
祈念を怠らざりしか、祈念の時よこしま邪なる思を起さざりしか。

二他人に対し。輕侮あなどり憤怒いかり嫉妬ねたみ害意そこない等のすべて人の生命財産名誉自由等に害を与へざりしか。

三己に対し。傲慢ごうまん懶惰らんだ染汚けがれ不摂生ふようじょう不忠愛ふしんせつ等をもて徳を損せざりしか。

斯らを能く吟味し己を尅せめて悔ひ改ため再び犯さざることを要す。

至心に回向す

発願ほつがんとは最終の目的とする遠大の希望のぞみなり。

一、従前これまで我れ真理に向ふべきは目的を過りし
全く心の無明やみに起因もとす。二、如来の恩寵めぐみにより
て我は覚醒さめたり。三、終局の要求とし永遠の生命と常住を平和を望むこと。四、大乘ボサツ
の志願じょうぐぼだいなる上求菩提下化衆生を遂げんこと。五、
邪よこしまをさけ正に進むこと。六、一切衆生と共に
平等の安寧やすきを求むること。

文に「彼国かのくにに到り畢いたて神通おわつを得て十方界じんつうに入
て苦の衆生を救はん虚空法界も盡んや我願も
またれ是の如くならんと発願す」

修養のすゝめ

諸賢よ心霊修養の要に祈祷拜礼、念仏三昧、坐禅工夫等あり是らの方法により如来の光明を

罪や悪い行いを造る原因には二つある。一には、自分の利己的な欲望を貪ることによる。二には、阿弥陀仏の慈悲の恩恵を忘れることによる。

懺悔する時に自身が造った罪の項目を点検すべきである、それには三つある。

一には、阿弥陀仏に対して、(一)阿弥陀仏のことを忘れていたかどうか、(二)阿弥陀仏へ祈り念じることを怠っていたかどうか、正しくない祈りを起こしていないかどうか。

二には、他者に対して、侮り・怒り・妬み・害する心などをもって人々の命・財産・名誉・自由などに損害を与えていないかどうか。

三には、自分に対して、傲慢・怠け・汚れ・不健康・不敬の心をもって、功德に損害を与えていないかどうか。

これらをよく省みて自分に問うて悔い改めて再び罪や悪を造らないことが必要である。

至心に回向す

願おこいを発すとは仏教徒にとっては究極の目的であり最大の希望である。

一には、仏が示される真理に向うべきであるのに、自分がその目的を見誤っていたことは道理に暗い心が原因である。二には、阿弥陀仏の慈悲の恩恵に自分は目覚めたのである。三には、究極の要求は永遠の命と変わることはない平和を望むこと。四には、大乘仏教の菩薩は覚りを求めながら生きとし生けるものたちを教化することが目的である。五には、不正を避けて正しい道に進むこと。六には、生きとし生けるものたちと共に平等に安寧を求めること。

また善導大師の『発願文』には「かの国に往き、六つの神通力を身につけて、あらゆる世界に入り、苦しむ人々を救くおう、宇宙全体が尽きることがないように、私の願おこいもまた尽きることがないとここに願おこいを発し終わる」

修養のすゝめ

賢者である皆様、信仰心の修養に必要なのは、礼拝祈念、念仏三昧、坐禅、公案など様々あり、これらの方法によって阿弥陀仏の智慧と慈悲

ぎやくとく^き
獲得し聖き人となり善き生活に至るを目的と
す。禅の大悟^{けんしょう}見性他力門の信心開発、キリス
ト教の聖霊に感じたりと曰ひ名を異^{こと}にすれど
も帰する処此大光明に接するに外^{ほか}ならず、斯^{この}光
を感得^{かんとく}して初めていける信仰に入たるものと
す。されば求めよ、真理の光明を。

の光を自分のものとして、聖なる人となって善
き信仰生活を送ることが目的である。禅宗の大
悟見性という境地も浄土宗の信心開発もキリ
スト教の聖霊を感じたというのも名称が違う
だけで、落ち着くところはこの仏の智慧と慈悲
の大いなる光に触れることをいうのである。こ
の光を自分のものとするので初めて活きた
信仰に入ったと言える。だからこそ真理の光を求
めなさい。